

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

検閲局との10年に及ぶ交渉の末に劇場公開された映画

『Spilt Gravy』

山本博之（京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授）

2022年6月、マレーシア映画の『Spilt Gravy』がマレーシア全国の劇場で公開された。舞台俳優で劇作家でもあるジット・ムラドの02年の演劇を映画化したもので、ジットも天使役で出演している。

天使役と言えば、ジットはヤスミン・アフマド監督の『タレントタイム』でも天使役を演じている。マレーシアでは天使が人間の姿で登場する映画は検閲に通らないため、『タレントタイム』では天使と言わずに観客に解釈を委ねている。しかし、天使とはっきり呼んだ『Spilt Gravy』は上映許可が下りず、『タレントタイム』とほぼ同じ頃に制作されたにもかかわらず、完成から11年の時を経ての新作公開となった。ジットが62歳で他界した4カ月後だった。

タイトルの『Spilt Gravy』は「(ご飯に)かけられた肉汁」で、「この親にしてこの子あり」を意味するマレー語のことわざ「肉汁はご飯にかけるもの」に由来する。

マレーシア映画には珍しく「父親とは何か」がテーマで、引退した著名なジャーナリストである父親が天使から余命1日と知らされ、疎遠になっていた5人の子どもたちを夕食に招く1日の物語である。

長男はアウトローの世界で生きる元軍人、長女は舌禍が絶えない劇作家、次男は不満ばかり言っている英語教師、三男は仕事もプライベートも完璧なゲイの建築家、次女は自分はトロフィーワイフだと割り切っている一児の母。それぞれ母親が違う5人の子たちは、古い世代で保守的な考えを持つ父親に反発するかのようにならざるを得ない生き方を選びながらも、父親のことをずっと気にかけている。

『Spilt Gravy』が検閲に通らなかったのは天使のためだけではない。辛辣(しんらつ)なブラックコメディで知られるジットが憑依したかのように、登場人物たちがマレーシアの政治的・宗教的なタブーに触れる際どいセリフを連発する。

1969年の5月13日事件も正面から扱っている。マレー人と華人の対立で100人以上の死者が出た事件で、国家転覆を企てた共産主義者が扇動したという政府の

公式見解以外を語ることは50年たった今でもタブーとなっている。本作品では、明らかに殺人に関わった一般市民のマレー人がその後すぐに日常生活に戻り、周りの人たちも彼を以前通り受け入れていたことを回想する場面がある。

劇場公開を勝ち取るため、劇中の「天使」という言葉に別の意味を重ねるなど、本作品にはこまごまとした工夫が重ねられている。

結末も夢オチにも見える終わり方になっている。実はエンドロールの最後で夢オチでないことが示されるが、マレーシアではエンドロールの終わりまで見る人がほとんどいないので気づかれない。かつてマレーシア映画でご法度だったホラーは夢オチにすることで公開が認められ、それを契機に事実上の解禁になった。本作品もマレーシア映画の検閲の1つの画期になるだろうか。

子どもたちから見れば女性関係にだらしなくてひどい父親だが、父親なりの子への思いも明らかになっていき、良くも悪くも「この親にしてこの子あり」という物語になっている。かつて子どもだった人たちにも、そして自分の子や他人の子の成長に何らかの形でかわっている人たちにも、ぜひ見ることをお勧めしたい。

< 筆者紹介 >

1966年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師、国立民族学博物館助教授などを経て現職。専門はマレーシアの地域研究。サバ州・サラワク州の社会史、ジャウィ(アラビア文字表記マレー語)の社会的役割、災害復興時の社会再編、物語文化圏と映画など関心領域は広い。編著書に『マレーシア映画の母 ヤスミン・アフマドの世界』(英明企画編集、2019年7月)がある。日本マレーシア学会(JAMS)理事。